

25 ちゅうどうはくと きん けびょう 25 鑄銅箔鍍金花瓶



指 定 県 宝 昭和61年 3 月27日
 所在地 白 田
 所有者 弥 勒 寺



天台宗龍華山弥勒寺は、白田中央に位置し、明治以来地方公共施設として文化教育の中心であり、また元三大師の縁日をもって名を知られた名刹である。そしてこの寺宝として伝来する花瓶は、県宝になっている重要品である。

この花瓶は、高さ24.2cm、重さ約2.36kgの金銅製品で、「応永十四丁亥年三月五日源忠安」の刻銘があり、14の4は二を横に並べた異体文字で記されている。

応永14年（1407）は、室町時代の始まりの頃である。源忠安という人物については現在のところ不明であり、したがって、この銅器がどのような由来で弥勒寺に蔵されているかについては解明されていない。

この銅器については、昭和19年（1944）9月に帝室技芸員の香取秀真氏が「水瓶の形を存す。応永の銘はあるが鎌倉期と見られる。密教護摩壇用の器で一對ありしものの一つか。かつて三井寺にこの時代のものありしが現存せず。弥勒寺のものは日本に現存する唯一ならん。」と鑑定されている。

つぎに、昭和26年（1951）7月に国立博物館の石田博士と県文化財専門委員一志茂樹博士とが調査をされて、その重要性を認めている。

なお現在の所、その器の用途については確定していないけれど、仏器として、水瓶・華瓶・宝瓶等として用いられたことが推定されている。